



TITLE:

プルーストにおける友情

AUTHOR(S):

村上, 祐二

CITATION:

村上, 祐二. プルーストにおける友情. 仏文研究 2004, 35: 69-84

ISSUE DATE:

2004-09-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/137956>

RIGHT:

ブルーストにおける友情

村 上 祐 二

友情はブルーストにおいて最も古いテーマのひとつである。すでに1893年に、友情を主題とするテキストが「ルヴュ・ブランシュ」紙に発表されており、この作品は«AMITIÉ»と題されてその3年後に発表された処女作『楽しみと日々』に再録されている。またこの作品自体が若くして死んだ友人ウィリー・ヒースに捧げられたものにほかならない。また、1895年から1889年頃にかけて執筆された『ジャン・サントウイユ』においても、多くのページがジャン・サントウイユとアンリ・ド・レヴェイヨンらの友人間の交流にさかれている。

このような事実にもかかわらず、このテーマはブルースト研究においては周辺的な場に追いやられたままであった。それはおそらく、代表作『失われた時を求めて』(1913-1927)において、この概念が語り手自身によって徹底的に批判され、とるに足らぬものとして片付けられてしまっているからであろう。また、同性愛者ブルーストという像もこの問題を扱いにくい微妙なものにしていることも考えられよう。

しかしながら『楽しみと日々』、あるいは『ジャン・サントウイユ』においては、友情は『失われた時を求めて』におけるそれとはかけ離れた肯定的な筆致で描かれている。そしてこれらの初期作品に現れた友情のイメージは『失われた時を求めて』の中にも、その批判的な言説と共存する形ではっきりと現れているのだが、ブルーストにおける友情のこのような側面は、ブルーストにおける友情を論じたアンリ・ボネ、ジル・ドゥルーズ、ヴォン・ド・ガンストラの考察¹⁾からは漏れている。そこで本論では、ブルーストにおける友情のテーマを、無視されがちであった初期作品にさかのぼり、その特徴を明らかにするとともに、その後、それが『失われた時を求めて』においてどのような形で深められていったのかを描き出すこと、そして、『失われた時を求めて』では理論的には否定されているこの概念が、どのような理由から批判され、最終的に作家においてどのような形をとっているのかを明らかにすることを目指す。

I. 「避難所」としての友情

I-1. ブルーストにおける友情のテーマの誕生

『見出された時』において、「家具とおしゃべりをするような狂気」あるいは「存在しないな

にものか」と言うレッテルを貼られるはるか以前、『楽しみと日々』の時期におけるブルーストによって、友情はどのようなものとして捉えられていたのか。まず、ラーキン・プライスによって1969年に発表された散文詩から見てゆく。このテキストは『楽しみと日々』の草稿に含まれ、一本の垂直線で消されているものであり、プライスは、この削除は同じ主題を持つ別のテキストを発表するために成されたのだと推測している。

L'amitié seule peut inspirer et former à sa ressemblance un entretien sur l'Amitié. Alors il est courageux, confiant, serviable, désintéressé, sincère et doux ; comme le platane, il répand au loin ses graines ailées et que les souffles élevés soutiennent et portent jusqu'à l'endroit précis où il naîtra par lui un arbre fraternel, et dans un tel entretien chacun reconnaît l'image auguste sinon de l'amitié dont nous avons effectivement investi et sacré un ami, au moins de celle que nous gardions enfouie entre les reliques au pied même des autels pour celui qui s'étant présenté fera reconnaître son droit. Quand ce véritable droit divin qu'il a de toute éternité sur notre cœur se sera manifesté, rien ne pourrait plus s'opposer à ce qu'il fût sacré notre ami et c'est le Saint-Esprit qui volera lui-même.²⁾

友情を主題とするこの詩は、植物とキリスト教のふたつの隠喩で描かれている。まず、舞い上がった風によって友情の種子は「兄弟愛に満ちた木」«un arbre fraternel»となるために「正確な場所」まで運ばれてゆく。種子が木に成長するという比喩は友情に豊穡の観念を与え、しっかりと「正確な場所」«l'endroit précis³⁾»まで運んでゆく風のはたらきは慈愛に満ちた自然の法則を喚起する。しかし「兄弟愛に満ちた木」という言葉を仲介として、後半部ではこの植物の隠喩はキリスト教の隠喩に変化してゆく。

この「兄弟愛に満ちた木」は革命時に植樹された「兄弟愛の木」«arbre de la fraternité»をふまえたものであると思われる⁴⁾。「兄弟愛」の概念は共和国の標語として、最も遅れて来たものであり、またもっとも周辺的なものとみなされていた。植樹においても、「自由の木」が町の中心に植えられたのに対し、この「兄弟愛の木」は郡境や村境などの辺境に植えられていた。しかし、このことは境界を越えた「兄弟愛」の意味を持つことになった⁵⁾。散文詩の中の「兄弟愛に満ちた木」もこのような隔てられた場に位置する未知の友に対する高貴な友情の隠喩となっている。また、この「兄弟愛」の概念は優れてキリスト教的な背景を持った概念である。こうして、自然的なイメージで語られていた友情は神聖なものに変化してゆく。冒頭の「そよ風」は、後半部で自ら舞い上がる「聖霊」にとって代わられる。ブルースト的友情はこのように、その誕生において、豊穡さと神聖さによって定義されている。しかしこのような態度は、友情に関する伝統的な考えの範囲に収まったものであり、未だブルースト独自の友情の特徴は現れてはいない。それが現れるには、『楽しみと日々』に«AMITIÉ»と題されて収められた散文詩を待たなければならない。この公式な誕生において、ブルースト的な友情の特徴がくっきりと浮かび上がってくる。

Il est doux quand on a du chagrin de se coucher dans la chaleur de son lit, et là, tout effort et toute

résistance supprimés, la tête même sous les couvertures, de s'abandonner tout entier, en gémissant, comme les branches au vent d'automne. Mais il est un lit meilleur encore, plein d'odeurs divines. C'est notre douce, notre profonde, notre impénétrable amitié. Quand il est triste et glacé, j'y couche frileusement mon cœur. Ensevelissant même ma pensée dans notre chaude tendresse, ne percevant plus rien du dehors et ne voulant plus me défendre, désarmé, mais par le miracle de notre tendresse aussitôt fortifié, invincible, je pleure de ma peine, et de ma joie d'avoir une confiance où l'enfermer.⁶⁾

ここで「秋風に晒され」ているのは「兄弟愛に満ちた木」の枝々なのだろうか。先のテキストからの隔たりは大きい。風に運ばれる種子という自然界における運動のイメージは消失し、ここでは室内のベッドという私的な休息空間の隠喩が用いられている。もはや友情が生じるのは対話「entretien」によってではなく、人を傷つけ、悲しませ、凍えさせる何らかの出来事につづく、一個の主体内の否定的心理状態においてである。それ自体すでに寝室によって保護されているベッドに重ね合わせられた友情は、外部の荒々しい出来事や敵意から主体を保護する、「避難所」としての性格をあらわにしている。確かにアリストテレスやキケロにおいてすでに、友人は逆境に陥ったときの避難所であるという考えが現れてはいるが、それは友情の二次的なあり方としてにすぎない⁷⁾。しかしこの時期のブルーストにおいては、順境であれ逆境であれ、避難所に保護され、隠れ家にかくまわれてあることが、友情の本質的なあり方であるとみなされているように思われる。このことはまた、先ほど見たテキストを犠牲にして、ブルーストがこちらの作品を発表したことによっても裏付けられる。そして、このような被保護性が、その後のブルーストの描く友情の特徴でありつづけることになる。

『ジャン・サントウイユ』においても、平等で均質な友情よりも、何らかの権力によってわが身を防衛してくれるような友情、「amitié qui a des poings et des armes⁸⁾」が優位に置かれている。同時に、友情におけるこのような被保護性は、自然法則に則ったものであると捉えられている。

Il n'est presque pas d'être, se dit-il [=Jean], pour qui un autre être n'existe dans l'amitié de qui il puisse déposer son cœur comme dans un asile fait pour lui. Chacun croit avoir rencontré un être unique, mais le grain de pollen qui va dans l'ovaire ne sait pas que tous les grains de pollen ont leur ovaire. Et la beauté de ces amitiés n'est pas, comme elles le croient elles-mêmes, dans une faveur mystérieuse du destin, mais dans une loi bienfaisante de la nature.⁹⁾

この一節では、先に見たふたつのテキストに見られた友情観が組み合わされている。ここに見られる「唯一の存在」«un être unique»や「運命の神秘的なはからい」«une faveur mystérieuse du destin»の否定は先の草稿の散文詩に見られた友情観からの距離を示しているが、植物の隠喩はそこから受け継がれたものにほかならない。さらに、ここでは種子以前の受粉のイメージが用いられている。しかしそれは友情の持つ精神的な結合性¹⁰⁾、あるいは何らかの生殖的なニュアンスを暗示するためではなく¹¹⁾、子房は先のベッド同様、友情の持つ「避難所」としての性格を表現す

るために用いられているという点に注意しなければならない。

このような友情観は『失われた時を求めて』の中にも受け継がれている。主人公がドンシエールの駐屯地に友人サン＝ルーを訪ねる場面において、慣れない土地で独り夜を過ごすことに怯える主人公は、兵舎のサン＝ルーの部屋で過ごすことを夢見る。このサン＝ルーの部屋は主人公への友情の象徴であると同時に、軍隊それ自体の象徴にもなっている。ここにも先に見た『楽しみと日々』の散文詩以来の「避難所」としての友情が明確に現れている。ここでは、それはサン＝ルーを代表とする軍人たちの意志によって築かれた要塞のようのものであり、主人公はその中で保護され、休息するのである¹²⁾。

以上に見てきた、ブルーストにおける「避難所」的友情観は、友情は受けるほうより、自ら行う能動性、そして相互間におけるそのような能動性によって成立する均等性に存するとする伝統的な解釈¹³⁾には反するブルースト的なものである。

ところで、以上に見てきたような「避難所」のモチーフは、しばしば熱の比喩を伴っている。『楽しみと日々』の「AMITIÉ」の温かいベッドに始まり、均等な熱と光によって周囲を照らし暖めるランプに同一視されるアンリ・ド・レヴェイヨン¹⁴⁾を経て、ドンシエールにおけるサン＝ルーの友情は燃素やガスに譬えられている¹⁵⁾。このようなブルースト的な友情が帯びる熱は、同じように友情を熱の比喩で語るモンテーニュの一節¹⁶⁾、あるいは光と炎の比喩で語るキケロの表現¹⁷⁾と比較すれば、相互的で安定した均質の熱とは異なり、凍えた主体のうちへと外部からもたらされ、覆いくるむものであるということが分かるだろう。

以上の分析から、ブルーストにおける友情とはまず、権力と熱によって、外部の寒さや危険から身を守ってくれる「避難所」であるとまとめておくことができるだろう。

I-2. 「友情の夜」

つぎに『ゲルマントのほう』における濃霧の夜、すなわち語り手自身によって「友情の夜」と呼ばれる場面の記述に焦点を絞ったうえで、そこに、「避難所」としての友情が具体的にどのような形をとって現われ、また深められているのかを探っていきたいと思う。

この「友情の夜」とはステルマリア夫人との会合の約束が急遽取り消され、絶望している主人公のところへ、モロッコの部隊にいたサン＝ルーが突如現われ、共にレストランに行き食事をする場面であるが、そこにおいて、サン＝ルーが現れる直前の主人公は、まさに「AMITIÉ」のテキストに見られたような悲しみ、涙、寒さという要素に取り巻かれているばかりではなく、サン＝ルーの到来自体が欠乏している熱を補うものとして捉えられている¹⁸⁾。さらに、つづいて見てゆくように、これに続く一連の場面も、この「AMITIÉ」のテキストに凝縮されたイメージを小説の言語によって展開させたものにほかならない。

まずはこのシーンの重要な舞台装置となる霧について触れておきたい。この霧は、かつてサン＝ルーと主人公が友情を深めた場所であるドンシエール滞在の記憶を呼び覚ますという働きもするが、それは心地よい白い霧でしかない。しかし、サン＝ルーが到着したとき、彼はそれがナイフで切れるほどの濃い霧であることを告げ、最終的に二人がレストランへと出発するときには

異様なものへと変貌している。

je me sentis perdu comme sur la côte de quelque mer septentrionale où on risque vingt fois la mort avant d'arriver à l'auberge solitaire ; cessant d'être un mirage qu'on recherche, le brouillard devenait un de ces dangers contre lesquels on lutte, de sorte que nous eûmes, à trouver notre chemin et à arriver à bon port, les difficultés, l'inquiétude et enfin la joie que donne la sécurité — si insensible à celui qui n'est pas menacé de la perdre — au voyageur perplexe et dépaycé.¹⁹¹

このような「大異変」の中に置かれることによって、二人が向かうレストランは危険な「霧の大洋²⁰¹」からの避難所へと変貌する。こうして、サン＝ルーと共に向かうこのレストラン自体が、ステルマリア夫人との甘美な一夜の夢想の挫折、そして死の危機としての濃霧からの避難所となることで、ブルースト的な友情が投影された空間になる。しかしこれでこの避難所が完成したわけではない。

このレストランはドレフュス派の知識人たちと閉鎖的な若い貴族たちという二種類の顧客で構成されており、前者には大きなホールが、後者には小さなホールがそれぞれ割り当てられている。御者に用のあるサン＝ルーを残して主人公は独りでこのレストランに入らなければならない、主人公は貴族たちに割り当てられた小さなホールの席に腰掛けてしまうが、すぐにそこから店の主人によって引き出され、すでに満員の大きなホールの中にある席に座らされてしまう。

Elle [=une place dans l'autre salle] me plut d'autant moins que la banquette où elle se trouvait était déjà pleine de monde et que j'avais en face de moi la porte réservée aux Hébreux qui, non tournante celle-là, s'ouvrant et se fermant à chaque instant, m'envoyant un froid horrible. Mais le patron m'en refusa une autre [...].²¹¹

外部の「大異変」によって、この夜のレストラン内部では両ホール間の対立は和らげられ、「ノアの箱舟²²¹」のような親密さと熱気が行き渡っているのだが、このドアの存在により、ひとり主人公だけは凍え、孤立感を感じている。ここでこのドアが「ヘブライびとたちに割り当てられたドア」と表現されていることは注目に値する。というのも、このドアのある大きなホールには、「あらゆる種類の外国人や知識人、絵描きたち」がいるのであり、このドアをユダヤ人専用と単純化するのは、ある種の意図が働いているのを感じさせるからである。つまりここでは、外部の寒さにユダヤ性が結び付けられているのである。もちろん作者ブルーストと主人公は区別されねばならないが、ここではブルーストが自身からユダヤ性を引き抜いて作り上げた無名の主人公が、この閉まり具合の悪いドアから「恐ろしい寒さ」として、そのユダヤ性が彼の身体の内側へと逆流して来るのを恐れているのではないだろうか。

このことは、この後のサン＝ルーの再登場に続く場面によって裏付けられる。遅れて中に入ってきたサン＝ルーは小さなホールに向かおうとするのだが、意外にも主人公が大きなホールの席

にいるのに気付く、彼の前のドアが開いているのを指摘し、店の主人に急いでこのドアを締め切って使えなくするように命じる。こうしてこの扉は閉じられるのだが、このユダヤ人のドアがサン＝ルーの指示によって閉じられたことは重要である。なぜなら、まさにこの場面自体において、この貴族の友はユダヤ人に対する、純粋なフランス性の化身として描かれているからだ。

Et alors, il faut bien le dire à la gloire de la France, quand ces qualités-là se trouvent chez un pur Français, qu'il soit de l'aristocratie ou du peuple, elles fleurissent [...] avec une grâce que l'étranger, si estimable soit-il, ne nous offre pas. [...] Mais c'est tout de même une jolie chose et qui est peut-être exclusivement française, que ce qui est beau au jugement de l'équité, ce qui vaut selon l'esprit et le cœur. [...] Je regardais Saint-Loup, et je me disais [...] que le véritable opus francigenum, dont le secret n'a pas été perdu depuis le XIII^e siècle, et qui ne périrait pas avec nos églises, ce ne sont pas tant les anges de pierre de Saint-André-des-Champs que les petits Français, nobles, bourgeois ou paysans, au visage sculpté avec cette délicatesse et cette franchise restées aussi traditionnelles qu'au porche fameux, mais encore créatrices.²³⁾

ここでこのようにサン＝タンドレ＝デ＝シャンの教会に重ねられている、このゲルマント家に属す友の名の由来に関して、伝記作家ジョージ・ペインターは、1902年にこのサン＝ルーのモデルである貴族の友人たちとブルーストが行った、サン＝ルー＝ド＝ノーの教会訪問を決定的な出来事として挙げている²⁴⁾。彼らは、半ばロマネスク様式、半ばゴシック様式のこの教会を訪れるのだが、このサン＝ルー＝ド＝ノーの近くには実際ゲルマントの名を冠した村があるという。ペインターはまたこの教会の特徴がコンブレー近郊のサン＝タンドレ＝デ＝シャンの教会に移されたことをも指摘している。コンブレーで語り手の一家が雨宿りをするこの教会は、小説内では純粋なフランス性の象徴の譬えとしてしばしば用いられている。

また、ここで『失われた時を求めて』におけるもうひとりの友人ブロックに触れておくことも必要であろう。とはいえ、サン＝ルーより以前に「コンブレー」で主人公の級友として登場し、最終篇に至るまで生き延びるこの友人は、あらゆる欠点²⁵⁾とユダヤ性²⁶⁾とを集約した存在として描かれており、小説全体においてこの人物との交流を通して友情のテーマが浮上することは一度もない。そしてこの「友情の夜」においても、このレストランはブロックの行きつけの店であったにもかかわらず、彼は不在であり、さらにこの直前に置かれたシャルリュス男爵とのトラブルのエピソード²⁷⁾およびサン＝ルーの言葉²⁸⁾とにより、この霧の夜の圏外へと遠ざけられている。以上に見てきたようなプロセスを経て、純粋なフランスの伝統に根付いた貴族であるサン＝ルーによって主人公を怯えさせるユダヤ性は排除され、「避難所」はそのような外部から遮断され、密封されたものとなる。

Ⅱ. 友情とコミュニケーション

前章では『楽しみと日々』の時期に散文詩という簡略で曖昧な形で現れた友情のイメージが、『失われた時を求めて』という小説言語の中で、具体的にはどのような形をとりながら発展していったのかを、「友情の夜」の場面の分析を通して追ってきた。これにより『失われた時を求めて』で語り手によって批判されている知的な友情とは異なった非言語的な友情のブルーストにおけるあり方、すなわち「避難所」としての性格が明らかになった。

しかしながら、ブルーストの主人公は、この「避難所」の中に見出された席にとどまりつづけること、あるいは自己を同化させきることを最終的に選択したのだろうか。そうでないのなら、そのような欲望あるいは試みはどのような事情によって挫折し、どのような方向に向かったのだろうか。ひと言で言えば、ブルーストにおいて友情は最終的にどのような地点に行き着いたのか。このような点を解明するため、ここからはおもに『失われた時を求めて』における友情を、コミュニケーションの観点から分析してゆく。

Ⅱ-1. 「律法の石版」の行方：ブルーストとモンテーニュ

「友情の夜」の分析を通して、友情の「避難所」の中で、友人の貴族性の中に同化されようとする、ブルースト的主体における友情の傾向が浮かび上がってきた。しかしながら、この「避難所」という形態はあくまでブルーストの主体における友情の現れであって、サン＝ルーにおいては、自らが「避難所」の役割のみを演じつづけることが友情であるということはあるえない。このことは、語り手自身によってはっきりと自覚されている。友情は平等性と相互性に根ざしたものであるがゆえに、その中で主体は自己と同質な領域を抜け出し、他者と出会い、和解することを余儀なくされる。こうして友情の問題はコミュニケーションの問題に置き換えられるのだが、このコミュニケーションとしての友情を『失われた時を求めて』の語り手は徹底的に否定している。その否定の言説の分析に先立ち、ここではまず、モンテーニュの友情論がブルーストにおいて占める位置を簡単に確認しておきたい。『ジャン・サントウイユ』において、ジャンとアンリを結びつけるのに無視し得ない役割を演じ、その写しが「祝福された朝に天から降ってきた律法の石版²⁹⁾」と呼ばれるこの友情論はコミュニケーションとしての友情の頂点に位置するものである。一度は絶対的な法としてブルーストに捉えられたこの友情論が『失われた時を求めて』のブルーストにおいて占める位置を知ることは、ブルーストがコミュニケーションとしての友情をどのように理解しているのかを知るためには不可欠なことである。

この友情論は『エッセー』第一巻に収められたものであり、友情をほかのあらゆる人間関係と比較し、それらのいずれよりも優れたものであるとしている。またそのような友情一般から区別して、モンテーニュが同僚であり詩人、ユマニストのエチエンヌ・ド・ラ・ボエシとの間で結んだ例外的で神秘的な友情を、亡き友を惜しみつつ語っている。ここでは細部に立ち入ることはしないが、その友情は次のように表現されている。

(a) En l'amitié dequoy je parle, [nos ames] se meslent et confondent l'une en l'autre, d'un melange si universel qu'elles effacent et ne retrouvent plus la couture qui les a jointes. [...] c'est je ne sçay quelle quinte essence de tout ce meslange, (c) qui ayant saisi toute ma volonté, l'amena se plonger et se perdre dans la sienne ; qui, ayant saisi toute sa volonté, l'amena se plonger et se perdre en la mienne, d'une faim, d'une concurrence pareille. (a) Je dis perdre, à la vérité, ne nous reservant rien qui nous fut propre, ny qui fut ou sien, ou mien.³⁰⁾

モンテーニュにおいて、それ自体すべての人間関係の頂点に立つ友情からさらに区別される、すべての言説と歴史を超越したラ・ボエシとの完全かつ純粋な友情は、このような他者の意志との融合状態によって決定付けられている。

ブルーストにおいて、このような友情はどのような地位を占めているのか。『ジャン・サントゥイユ』におけるこの友情論の登場するエピソードにおいては、危機に瀕したジャンをアンリが救いレヴェイヨン家の馬車の中に避難させ、そのまま彼の家にまで連れてゆくというものだった。このことから、この時点においてモンテーニュ的な融合の観念は、避難所への夢想と差異化されてはいないといえることができる。

しかしこの融合そのものが同作品のほかのエピソードに現れることもなければ、その後の小説に現れることもない。後者において友情は、避難所として現れるか、さもなければ芸術家の義務と対立する知的な友情としてしか現れていない。このことは、例の友情論がブルーストにおいて破棄されたことを示すのか。1920年1月に、批評家ポール・スーデーに宛てた手紙には、次のような表現が見られる。

Je crois que votre antisubjectivisme est juste pour vous, parce que vous avez rencontré un être d'exception, et que Mme Souday expliquait trop pourquoi vous avez fait « chanter votre rêve », comme elle le sien. Mais de telles unions sont si rares qu'elles ne peuvent justifier que la philosophie de ceux dont elles furent la bénédiction. C'est parce que c'était elle, c'est parce que c'était vous. Vous avez le droit d'être optimiste et objectiviste. Le romancier a le devoir d'être pessimiste et phénoméniste.³¹⁾

ここで問題になっているのは、友情ではなく異性間における恋愛あるいは夫婦間の愛ではあるけれども、モンテーニュの友情論中のあまりに有名な一句を念頭においたこの一節に、ブルーストのモンテーニュ的な友情に対する態度が明確に表れている。モンテーニュの語るような友情は、「楽天主義」的で「客観主義」的な精神による産物にすぎず、「小説家」としての自らの世界とは相容れないというのである。

この手紙に加え、『失われた時を求めて』においては現れないモンテーニュの友情論が、その草稿において、同性愛者たちの誤解に基づく理想として片付けられていること³²⁾、そして『失われた時を求めて』においては、モンテーニュが友情において体験したような意志的自己喪失あるいは「自我の領域の拡大³³⁾」は主人公と祖母の関係においてのみ現れている³⁴⁾ということ、以上

の三点から、『ジャン・サントウイユ』における「律法の石版」は割られてしまったということになる。それでは、ブルーストにおいて、友情の何が完全なコミュニケーションを妨げるのか。そのことを明らかにするためには、ブルーストにおける反友情論を検討する必要がある。

Ⅱ－２．友情の否定：会話と友の現前

モンテーニュにおいてすべての理論を超越したものとして称揚された友情は、ブルーストにおいては逆に理論的な全面否定を被る。

サン＝ルーとの出会いの時期においてすでに、主人公は夢見ていた友情への幻滅を覚える。深い共感を打ち明けつつ、二人の友情は生涯最大の喜びであると語る貴族の友のそのような態度に違和感しか覚えることのできぬ主人公は、すでに友情の実在性自体に疑問を感じ、孤独における内省がもたらす幸福感をそれに対置する。友情に対するこのような態度は変わることはなく、その非実在性は作品が進むにつれて強調されてゆく。それでは、何が友情をこのようなさげすむべきものにしているのか。『見出された時』では次のように言われている。

Le signe de l'irréalité des autres [plaisirs] ne se montre-il pas assez, soit dans leur impossibilité à nous satisfaire, comme par exemple les plaisirs mondains qui causent tout au plus le malaise provoqué par l'ingestion d'une nourriture abjecte, l'amitié qui est une simulation puisque, pour quelques raisons morales qu'il le fasse, l'artiste qui renonce une heure de travail pour une heure de causerie avec un ami sait qu'il sacrifie une réalité pour quelque chose qui n'existe pas (les amis n'étant des amis que dans cette douce folie que nous avons au cours de la vie, à laquelle nous nous prêtons, mais que du fond de notre intelligence nous savons l'erreur d'un fou qui croirait que les meubles vivent et causerait avec eux [...]).³⁵⁾

この批判は芸術家という自己の天職を悟った時点においてなされたものであり、友情は芸術家の義務と対立するものとして捉えられているのだが、ここで注目すべきことは、友情がその一形態である会話に還元されてしまっているということである。この単純化はブルーストの友情批判の原則をなしている。

La conversation même qui est le mode d'expression de l'amitié est une divagation superficielle qui ne nous donne rien à acquérir. Nous pouvons causer pendant toute une vie sans rien dire que répéter indéfiniment le vide d'une minute, tandis que la marche de la pensée dans le travail solitaire de la création artistique se fait dans le sens de la profondeur, la seule direction qui ne nous soit pas fermée, où nous puissions progresser, avec plus de peine il est vrai, pour un résultat de vérité.³⁶⁾

友情の会話への単純化は、『楽しみと日々』や『ジャン・サントウイユ』には見られない態度である。このような極端な考えはどこから来たのか。むしろそこには芸術家としての自覚という要

因が大きく作用しているわけだが、友情の会話への同一化はおそらくエマソンから受け継がれたものであると思われる。1895年には作家が「陶醉して³⁷⁾」読んだエマソンは『楽しみと日々』のエピグラフに多用され、『ジャン・サントウイユ』の中でも何度か言及されている。

But I find this law of one to one peremptory for conversation, which is the practice and consummation of friendship. [...] Now this convention, which good sense demands, destroys the high freedom of great conversation, which requires an absolute running of two souls into one.³⁸⁾

エマソンはここでモンテーニュの一对一の法則を引き継ぎつつ、会話を友情の実践であり完成とみなしているが、ブルーストがこのような「偉大な会話」としての友情に反して、自身の反友情論を構築していったことは、ラスキンの『胡麻と百合』の翻訳に付された注に確認することができる。そこで「コミュニケーションの様式」の観点から会話を読書に比較しながら³⁹⁾、ブルーストは、他者、すなわち作者の思考に一体化させるものとして読書をたたえ、それに会話を対置している。それでは友情における会話は、この翻訳の同じ訳注の中で述べられている、「精神的な衝撃度の弱さ⁴⁰⁾」あるいは声という様式の欠点ゆえに否定されているのか。『失われた時を求めて』においては必ずしもそのような理由だけによるものとは限らない。そのことは友情否定の文脈において現れた、少女たちとの会話に関する記述から明らかである。

Près de ces jeunes filles, au contraire, si le plaisir que je goûtais était égoïste, du moins n'était-il pas basé sur le mensonge qui cherche à nous faire croire que nous ne sommes pas irrémédiablement seuls et qui quand nous causons avec un autre nous empêche de nous avouer que ce n'est plus nous qui parlons, que nous nous modelons alors à la ressemblance des étrangers et non d'un moi qui diffère d'eux. Les paroles qui s'échangeaient entre les jeunes filles de la petite bande et moi étaient peu intéressantes, rares d'ailleurs, coupées de ma part de longs silences. Cela ne m'empêchait pas de prendre à les écouter quand elles me parlaient autant de plaisir qu'à les regarder, à découvrir dans la voix de chacune d'elles un tableau vivement coloré. C'est avec délices que j'écoutais leur pépiment. Aimer aide à discerner, à différencier.⁴¹⁾

この「嘘」とはまさに友情のことをさしているわけだが、この一節から、友情における会話が批判されるのは、それが他者へと類似させるように仕向けるからであり、言い換えれば個性を消去してしまうからであるということが読み取れる。

友情における会話と対立させて、この引用の後半部では、少女たちとの会話の性格が述べられているが、ここで重要なのは、このタイプの会話、すなわち友情よりも利己主義的な恋愛における会話においては、主人公はもっぱら聞き、見ることのできる立場にとどまっていられるということである。このことから、友情における会話の持つ他者への同化作用は、友人の現前自体、言い換えれば、相手に聞かれ、見られるという状況によるものだといえる。ラスキンに関するシャ

ルロッテ・ブロイヘルの本の書評のなかで、「山や川や町しか思い浮かべられないとき、世界はとても空虚なものだが、しかしその思考がわれわれの思考につながっている友人があちらこちらに生きているのを知っていることで、この世界は人の住みうる庭になるのである」というゲーテの言葉に異議を唱えるラスキンの、「誰も私のことを考えていないときほど私が幸福であったことはなかった。私の最大の幸福は、私自身が観察されることなく観察することであった」⁴²⁾という言葉に集約される「宗派」あるいは「学派」に自らを組み入れる⁴³⁾ブルーストの賛同はこのことを裏付けている。

見ると同時に見られる、聞くと同時に聞かれるという相互的で対称的な友情関係は、ここに至って明確に否定されている。友人の現前は、ブルースト的な主体にとっては脅威なのであり、そればかりではなく友人と友人の間の同じ思考によるつながり自体が、自己の実現を妨げるものとして現れている。

それではブルーストは友情において、モンテーニュのような完全なコミュニケーションを放棄しきったといえるのだろうか。友情の「避難所」から出てきて、自我の閉域に決定的にこもることを選択したのか。

Ⅱ-3. 芸術家における友情

ブルーストにおいて友情の行き着いた地点を明らかにするためには、何よりもまず『失われた時を求めて』の舞台からのサン＝ルーの退場に注目する必要がある。サン＝ルーに立ち帰ることは、哲学者でもなければモラリストでもなく、小説家以外の何ものでもなかったブルーストが、つねにこの人物を通して自らの友情に関する考えを表現している以上、この人物の最期にブルーストの友情に対する最終的な態度を読み取ることができるからである。「避難所」として現れた友人は、最終的にどのような結末を迎えたのか。戦死したサン＝ルーの埋葬の記述を見てみよう。

Lui qui toujours dans cette vie avait semblé, même assis, même marchant dans un solon, contenir l'élan d'une charge, en dissimulant d'un sourire la volonté indomptable qu'il y avait dans sa tête triangulaire, enfin il avait chargé. Débarrassée de ses livres, la tourelle féodale était redevenue militaire. Et ce Guermantes était mort plus lui-même, ou plutôt plus de sa race, en laquelle il se fondait, en laquelle il n'était plus qu'un Guermantes, comme ce fut symboliquement visible à son enterrement dans l'église Saint-Hilaire de Combray, toute tendue de tentures noires où se détachait en rouge, sous la couronne fermée, sans initiales de prénoms ni titres, le G du Guermantes que par la mort il était redevenu.⁴⁴⁾

歴代のゲルマント一族が眠り、初めて主人公がゲルマント夫人を見た場所であるサン＝チレール教会という、物語内の事実の面においても、主人公の意識においても、ゲルマントとその起源を象徴する場所にサン＝ルーが還されたのは何を意味するのか。それは、サン＝ルーという存在の

本質は、ゲルマンの血統であり、彼の全存在はこの血統によりあらかじめ規定されていたのであり、その死によってそこへと戻り、そこに融合するということであろう。このようにサン＝ルーが融合し、自己の個性性を喪失する場が、その家系あるいは名である以上、彼らの完全な友情はあらかじめ不可能であったのだといえる。

「友情の夜」の貴族性の「避難所」において獲得された場＝席«place»はこうして完全に失われた、あるいは取り消されたことになる。しかしながら、「友情の夜」においてすでに、友人間におけるこのような解消し得ない差異は語り手には認識されていたのである。

[...] telles étaient les qualités, toutes essentielles à l'aristocratie, qui, derrière ce corps, non pas opaque et obscur comme eût été le mien, mais significatif et limpide, transparent comme à travers une œuvre d'art la puissance industrielle, efficiente qui l'a créée, et rendaient les mouvements de cette course légère que Robert avait déroulée le long du mur, aussi intelligibles et charmants que ceux de cavaliers sculptés sur une frise.⁴⁵⁾

ここでサン＝ルーは、反ゲルマン的な知性への情熱から解放され、彼を構成する貴族性そのものへと還元されている。この部分の草稿では、両者の身体は、「曖昧なテキストの不透明で、退屈な外観」と「その背後に思考が透けて見える既知の明瞭な言語でかかれた身体⁴⁶⁾」という対立で描かれている。ゆえに、モンテーニュとラ・ボエシとの間に置けるような、互いのうちに自己の鏡像を見出すことで自己の像を堅固なものとし、また自我の領域を拡大するといった友情は、彼自身ゲルマンの似姿であるサン＝ルーとの間には成立しようがなかったのである。そして彼らの友情の、この根源的な不可能性がサン＝ルーの埋葬において決定的な形で表現されているのである。ここに現前的な交友のレベルにおける、ブルースト的友情のひとつの結論を読み取ることがでるだろう。それは友情のふたつのレベルにおける否定である。友情は一方で会話という表現様式自体の不完全性によって否定され、他方で一度は「避難所」として肯定された貴族性という、同化を拒む引き抜き得ぬ根ゆえに否定されているのである。

このような点は明確になってもしかし、まだ疑問は残る。それは、ブルーストは完全なコミュニケーションを友人のほうへと求めるのを完全に放棄してしまったのかということである。サン＝ルーをゲルマンの家系へと帰還させた後、彼自身はどこに、自己を溶け込ませるべき場を見出したのか。「友情の夜」で獲得された場は「避難所」の消失のあとどのような方向へと求められたのか。

ラ・ボエシの「兄弟よ、兄弟よ、それでは君はわたしにひとつの場を拒むのか⁴⁷⁾」という断末魔の謎めいた叫びに答えて、モンテーニュは友人の像の保証人として、その著作を刊行し、自身の『エッセー』の第一巻の主賓席に彼の場を与えたのだ。自身の血統のほうへとおのれの個性を解体するのではなく、ブルーストの主人公はモンテーニュ同様「書くこと」を選ぶのだが、ブルーストにおいては、自己の像の保証人の役は自分自身によって請け負われている。「不透明で、曖昧な身体」、すなわち「不透明で面倒なテキスト」は、『見出された時』において、解説すべき

記号に満ちた身体として捉えなおされ、書物を書くことは、そのような記号を解読し、暗闇の中から光のもとへと引き出すことだと定義されることになる⁴⁸⁾。そしてこのような書物が向けられているのは、ほかならぬ友人への友情なのである。このような考えの萌芽がすでに『ジャン・サントゥイユ』に現れている。

レヴェイヨンの人気のない丘を舞台とした、孤独についての瞑想が行われる断章において、主人公ジャンは丘のくぼみに孤独に生きる一輪のジギタリスに、はじめて、これはこれであってほかのものには替えられないという個性の体験をする。そしてこのジギタリスに自身を重ね合わせながら、ジャンは次のような考察をめぐらせる。

Et moi aussi, se dit-il, bien souvent je me suis senti isolé du reste du monde comme la pauvre digitale. Mais dans d'autres moments j'ai senti qu'il était plein de pensées pareilles à la mienne depuis le passé le plus lointain, et qu'il en naîtrait aussi dans l'avenir, pour qui j'avais même quelquesfois songé à conserver, pour offrir à leur amitié, dans un livre qui serait moi-même, une pensée qui ressemblerait à la leur.⁴⁹⁾

ここでは、もはや子房と花粉のようなカップルではなく、あるのは孤立した一輪のジギタリスだけであり、この植物にジャンが共感するのは、孤独と沈黙とに包まれた還元不可能な個性性においてである。植物はふたつのものの結合ではなく、まず、自閉した自律的なものとして捉えられている⁵⁰⁾。現前する親友アンリを傍らにしての、自己の分身としての書物を通した未来の友人とのコミュニケーションという考えの出現は、友情が唯一可能になる場を、読書という「沈黙」のコミュニケーションのうちに見出そうとする『胡麻と百合』の序文⁵¹⁾を経て、『見出された時』へと受け継がれてゆく。

Comme la graine, je pourrais mourir quand la plante se serait développée, et je me trouvais avoir vécu pour elle sans le savoir, sans que ma vie me parût devoir entrer jamais en contact avec ces livres que j'aurais voulu écrire [...]. [Toute ma vie jusqu'à ce jour] aurait pu [être résumée sous ce titre : Une vocation] en ce que cette vie, les souvenirs de ses tristesses, de ses joies, formaient une réserve pareille à cet albumen qui est logé dans l'ovule des plantes et dans lequel celui-ci puise sa nourriture pour se transformer en graine, en ce temps où on ignore encore que l'embryon d'une plante se développe, lequel est pourtant le lieu de phénomènes chimiques et respiratoires secrets mais très actifs. Ainsi ma vie était-elle en rapport avec ce qu'amènerait sa maturation.⁵²⁾

「聖ヨハネによる福音」(XII, 24)をふまえた、来るべき生命のために死んでゆく種子への自身の肉体への重ね合わせに、『楽しみと日々』草稿の散文詩で見た友情への回帰を読み取ることができないだろうか。ここに現れているのは、ブルースト世界においてその姿を消していた、豊饒性と聖性に特徴付けられた友情ではないだろうか。確かにこの草稿のテキストでは、『見出された

時』とは異なり、「死」という要素は認識されてはいなかった。しかしそこで歌われていたのは、現前する友人への友情、「われわれが実際にひとりの友人を任命し、聖別した友情」ではなく、「やがて姿をあらわし、彼の権利を認めさせる」友人への友情であった。

書物という、時間を超えた彼方にある「正確な場所」へと運ばれてゆく「種子」としての身体を与えること、会話という、現前的で差異の同化に基づいたコミュニケーションではなく、差異をそのものとして表現する身体を与えること、否定された現前する友人との友情は、このような形で肯定されるに至ったのである。

注

- 1) Henri Bonnet, *Le Monde, l'amour, l'amitié*, Vrin, Paris, 1946, pp. 167-188 ; Gilles Deleuze, *Proust et les signes*, Presses Universitaires de France, Paris, 1969, rééd. Quadrige, 1998. pp. 14, 40-41, 54, 116 ; J. Von de Ghinste, *Rapports humains et communication dans À la recherche du temps perdu*, Nizet, Paris, 1975, pp. 74-83.
- 2) *Bulltin de la Société des Amis de Marcel Proust et des amis de Combray* (以下BMPと略す), n°19, 1969 p. 804. Jean Santeuil, précédé de *Les Plaisirs et les jours* (以下それぞれJS, PJと略す), p. 963の注に従い、いくつかの表現を改めた。この注は削除された冒頭の一文も示している: «Un entretien sur l'amitié devrait ressembler à l'amitié elle-même.»
- 3) 1908年にルイ・ダルビュフェラに宛てた手紙の中で、ブルーストが手を加えて引用している、シュリー＝プリュドムの「未知の友たちへ」«Aux amis inconnus»の詩句中に«Parfois un mot, complice intime, vient rouvrir / Quelque plaie où le feu désire qu'on l'attise, / Tombe comme une larme à la place précise / Où le cœur mal fermé l'attendait pour guérir.» (強調は引用者) という一節が見える。(La Correspondance de Marcel Proust (1880-1922), éditée par Philip Kolb, Plon, 21 vol., 1976-1993, t. VIII, p. 294.) (以下Corr.と略す)
- 4) ビエール・ラルースの『19世紀世界大辞典』の«arbre»の項によれば、この「兄弟愛の木」は、しながらプラタナスではなく、コナラまたはポプラであったという。
- 5) François Furet et Mona Ozouf, *Dictionnaire critique de la Révolution française*, Flammarion, 1988, p. 732.
- 6) PJ, p. 120. (初出は, *La Revue blanche*, n° 21-22, juillet-août 1893.)
- 7) Aristote, *Étique à Nicomaque* ; 1155a, Cicéron, *De amicitia*, VIII-26.
- 8) JS, p. 605.
- 9) *Ibid.*, p. 767.
- 10) たとえば, エティエンヌ・ド・ラ・ボエシがモンテーニュに送ったラテン詩の中に現れているような結合である。«*Insita ferre negat malum cerasus, nec adoptat / Pruna pyrus ; non id valeat, pugnantibus usque / Ingeniis, nec longa dies, nec vincere cura. / Arboribus mox idem aliis haud segnis adhaesit / Surculus, occulto naturae fœdere ; iamque / Turgentes coeunt oculi, & communibus ambo / Educunt fœum studiis : viget aduena ramus, / Et patrium humorem stirps laeta ministrat, & ultro / Migrat in externam mutato nomine gentem. / Haud dispar vis est animorum, hos nulla reuinctos / Tempora dissociant, hos nulla adiunxeris arte.*» (Ad Michaëlem Montanum dans *Œuvres complètes d'Estienne de La Boétie*, W. Blake and Co., Bordeaux, t. II, p. 72.)

- 11) 『ジャン・サントウイユ』においては、花粉と子房のイメージは、単にサロン間の情報伝達を描いた次の一節に用いられていることから分かるように、まだ後のシャルリュス＝ジュピアンの性的価値を帯びてはいないように思われる：«Hélas, sa voiture qui ignorait que la duchesse de Doudeauville irait chez Mlle de Diewitch et que Mme de Thianges viendrait le dire devant Mme Marmet, jouant ainsi le rôle du vent qui porte le pollen du platane sur l'ovaire des platanes femelles, n'était pas encore arrivée.» (JS, p. 665. 強調は引用者)
- 12) クロード・ドーフィネはこのような保護されることによる喜びをコンプレーでの子供時代への退行の喜びに結び付けている。Claude Dauphiné, «Les chambres du narrateur dans *La Recherche*», in *BMP*, n° 31, 1981, pp. 339-356.
- 13) Cf. Aristote, *L'Étique à Nicomaque*, 1159a-1159b; Descartes, *Passions de l'âme*, dans *Œuvres de Descartes* (以下 *ŒD*), t. XI, Vrin, 1996, pp. 389-390; *Correspondance*, dans *ŒD*, t. IV, p. 612.
- 14) JS, p. 411.
- 15) *À la recherche du temps perdu*, édition publiée sous la direction de Jean-Yves Tadié, 4 vol., Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1987-1989, t. II, p. 403. (以下巻数のみをローマ数字で示す)
- 16) 女性への愛情«l'affection envers les femmes»の火が「熱病の火」であるのに対し, «En l'amitié, c'est une chaleur generale et universelle, temperée au demeurant et égale, une chaleur constante et rassise, toute douceur et polissure, qui n'a rien d'aspre et de poignant.» (*Essais*, dans *Œuvres complètes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1962, p. 184.)
- 17) «*Virtus, uirtus, inquame [...] et conciliat amicitias et conseruat. In ea est enim conuenientia rerum, in ea stabilitas, in ea constantia ; quae cum se extulit et ostendit suum lumen et idem adspexit agnoustique in alio, ad id se admouet, uicissimque accipit illud quod in altero est ; ex quo exardescit siue amor siue amicitia, utrumque enim ductum est ab amando*». (Cicéron, *De amicitia*, XXVII-100.)
- 18) II, pp. 688-689.
- 19) II, pp. 692-693.
- 20) II, p. 695.
- 21) II, pp. 695-696.
- 22) II, p. 700.
- 23) II, pp. 702-703. (強調は引用者)
- 24) George D. Painter, *Marcel Proust, A Biography*, Chatto & Windus, London, 1959, vol. 1, pp. 301-302.
- 25) サン＝ルーと主人公の交流が友情一般への考察へと話者を導くのに対し, 主人公に対するブロックの言動は人間の欠点一般の考察への契機となっている。Cf. II, pp. 100-104 ; III, p. 488.
- 26) ブロックのユダヤ性については, Jeanne Bern, «Le juif et l'homosexuel dans “À la recherche du temps perdu”», in *Littérature*, n° 37, 1980, pp. 100-112を参照。
- 27) II, pp. 676-678.
- 28) *Ibid.*, p. 693.
- 29) JS, p. 256.
- 30) Montaigne, *op. cit.*, pp. 186-187.
- 31) *Corr.* t. XIX, p. 38. (強調は引用者)
- 32) III, p. 950.
- 33) Jean Starobinski, *Montaigne en mouvement*, Gallimard, 1982, p. 113.
- 34) II, p. 28.
- 35) IV, p. 454. (強調は引用者)
- 36) II, p. 260.

- 37) Corr. t. I, p. 363.
- 38) Ralph Waldo Emerson, « Friendship » dans *Essays*, First series, The temple classics, 4th edition, 1904, pp.155-156.
- 39) «Malgré les illustres exceptions que l'on peut citer, malgré le témoignage d'un Emerson lui-même, qui lui attribue une véritable vertu inspiratrice, on peut dire qu'en général la conversation nous met sur le chemin des expressions brillantes ou de purs raisonnements, presque jamais d'une impression profonde.» (*Sésame et les Lys*, Éditions complexe, Bruxelles, p. 114.)
- 40) *Ibid.*
- 41) II, p. 261. (強調は引用者)
- 42) *Essais et Articles*, dans *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et Mélanges* et suivi de *Essais et Articles*, édition établie par Pierre Clarac, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1971, p. 480.
- 43) *Ibid.*
- 44) IV, p. 429.
- 45) II, p. 707. (強調は引用者)
- 46) II, p. 1224.
- 47) Montaigne, *Lettres*, dans *Œuvres complètes*, textes établis par Albert Thibaudet et Maurice Rat, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1962, p. 1359.
- 48) IV, pp. 456-459.
- 49) *JS*, p. 471.
- 50) これは、そのまま『失われた時を求めて』にも受け継がれてゆく。『花咲く乙女たちの陰に』の中で、芸術家の義務と対立させて友情を非難した箇所では、次のように言われている。「Et l'amitié n'est pas seulement dénuée de vertu comme la conversation, elle est de plus funeste. Car l'amitié nous persuade [...] de considérer [les paroles que notre ami nous a dites] comme un précieux apport alors que nous ne sommes pas comme des bâtiments à qui on peut ajouter des pierres du dehors, mais comme des arbres qui tirent de leur propre sève le nœud suivant de leur tige, l'étage supérieur de leur frondaison.» (II, p. 260.) (強調は引用者)
このようにブルーストにおいて友情と関連して頻出する樹木の隠喩を、樹木への友情を説き、同じく樹木の比喩を好む作家、モーリス・バレスの『根こぎにされた人々』(1897)におけるプラタナスの挿話と比較すれば、その性格が際立つであろう。ブルーストにおいて、他者から切り離され、自己完結した存在の比喩として用いられる樹木は、バレスにおいては、諸々の個を統合する全体、「連邦」「fédération」の縮図として捉えられている。(Les Déracinés, dans *Romans et voyages*, Laffont, 1994, pp. 596-599.)
- 51) «Sans doute, l'amitié, l'amitié qui a égard aux individus, est une chose frivole, et la lecture est une amitié. Mais du moins c'est une amitié sincère, et le fait qu'elle s'adresse à un mort, à un absent, lui donne quelque chose de désintéressé, de presque touchant. [...] Dans la lecture, l'amitié est soudain ramenée à sa pureté première.» (*Pastiches et Mélanges*, dans *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et Mélanges* et suivi de *Essais et Articles*, édition établie par Pierre Clarac, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1971, p. 186.) (強調は引用者)
- 52) IV, p. 478.